



(左) まず紙に下書きし、トレーシングペーパーに写してから、木材に描く。(中) 一般的な彫刻欄間のほか、組子欄間などさまざまな種類があり、高い技術を要する。(右) 八角堂の建物外側の彫刻。十二支が後ろを向いているのは、建物内部を覗いている設定だから。写真は十二支の兎だが猫が紛れており、聖峰さんの遊び心。

大阪欄間  
17世紀初期に起源。風通しが良く、寺や和式住宅の客間などに用いられる。高橋親子は、屋久杉、加賀杉、春日杉、ケヤキ、クスノキなどを使用。神代杉といい、水・土中に長期間埋もれ蒸された、色が黒く木目が美しい貴重な杉を使うこともある。



# 技で生きる

## とらうらと。

今  
もっと  
地場産！  
vol.3

大阪欄間 伝統工芸士

高橋聖峰(父)さん(以下 聖)  
高橋孔明(子)さん(以下 孔)

### 欄間から移りゆく

〈聖〉今、若い人は、欄間の存在も知らんやろう。家も洋式で、建築期間も短いものになったし、欄間の需要は減るばかりや。

そんな時代の変化の中でも「木材やったら何でも受けてやる！」と思って頑張ってきたんや。

最近、外国へ

の贈与・記念品  
や小物、だんじり、社寺仏閣や



修復作業なんかもやってるよ。

だんじりには、その土地の歴史が彫られている。土地の物語の場面名しか書かれていない紙で発注がくる場合が多いから、ストーリーの聞き取りをして、自分の頭の中でイメージを作っていくんや。一から要望を聞いて、描きおこす仕事なんやで。

### 生きるために、技を磨く

〈聖〉15歳で故郷の和歌山を出て、大阪の欄間工房に住み込みで弟子入り。

当時は、お小遣いが月500円。とにかく仕事ばかりしてた。辞めたいと思っても帰る家がない。だから働くしかなかったんや。一生懸命やったら、兄弟子も可愛かってくれたし、技も身に付いたしね。

息子が小学校に上がる頃「転々とするのはやめよう」と思い、独立したんや。住むところがあるって、ほんまに幸せなことなんやで。

〈孔〉僕は、初めは絶対に継ぎたくなかった。高校を出て「何しよう？」と軽い気持ちで始めたのがきつかけ。いやあ、間違いやったね(笑) そっ思ってしまうくらい大変な仕事。

でも、納品しに行った先の人たちに「こんなええもの作ってくれてありがとっ」と言われると嬉しいから！

### 父から息子

〈聖〉息子には、同じものを作らず、好きなようにやってほしい。その代わり、自分の作ったものを理解してほしいし、お互い認め合いたい。

〈孔〉父と言いがいになることはよく



ある。こだわりますと特に。でも自分の孫・ひ孫に「こんな凄いもの作ってたんか」と思われたいから、手を入れたくなくなってしまっ。

これからは皆さんに、無関心をやめ、世の中にはこういう仕事があるんだということを分かかってほしい。

### 心の貧乏はしてへん！

〈聖〉「こういうのできへん？」と今までになかったような注文もくる。こっちも職人やから「よっしゃ！ やったろ！」と燃えるんや。

相手の声に期待以上に応える、それが信用となって今までやってこれた。金の貧乏はしたかもしれんけど、心の貧乏はしてへんで！



左が聖峰さん、右が孔明さんの手。孔明さんの手には強い力のみを握るため、のみだこができています。聖峰さんの手は、長年 道具を握り続けているせいか、指が太く大きい。二人とも職人の手をしている。



(上) 金属を溶かし、合金を作る。不純物を浮かし取り除く作業も兼ねている。(中) 成形したものを削る。(下) 絵付け後、腐蝕する硝酸。



大阪浪華錫器 加飾 伝統工芸士 佐々木義隆さん  
すべてを身に付けてから  
まず錫器作りは、合金を作ることから始まります。錫単体では、柔らかくて加工しづらいため、ほかの金属を3%溶かし混ぜます。  
次に鑄込みといって、錫が溶けているうちに石やセメントなどの型に流し込み、成形していきます。この鑄込みの型も自分たちで作成します。成形ができたなら、ろくろで磨き削っていきます。削る単位は0.1ミリ単位。全て同じにならないと商品になりません。その後、商品によって



は加飾し、注ぎ口や取っ手を付けます。細かい傷やつなぎ目は、きさげ(鈍角で幅の広い刃先の工具)などで修正し、綿の布で綺麗にします。  
私の仕事は加飾です。ですが、加飾以外の全ての行程を覚えていきますし、修行しています。そうでなければ、やっていけません。  
加飾の仕事とは  
成形し削ったあとに、耐酸性のラッカーで絵付けをします。  
そして濃度の違う硝酸に二度付け、水洗いをまた二度します。これを腐蝕と言います。薬品を使うので大変危険ですし、国の許可も必要です。  
この腐蝕は、鉛の入った商品への技巧です。鉛は人が口を付けるものには向かないため、徐々に商品として減りつつあり、腐蝕の技術も薄くなりつつある。けれども技術として残していかなくは消えてしまふ。難しいところなのです。



大阪浪華錫器  
7~9世紀頃、日本に伝わり、江戸時代に広まる。イオン効果が高く、酒をまるやかにする作用や防湿性に優れ、幅広く使用されている。

手が覚えるまで描く  
絵付けですが、下書きはしません。構図・図案は全て頭に入っていますし、手が覚えています。  
今、見習い中の子にも言っているのですが、「1時間かけて綺麗なものを描いても、ものにはならない。1日に20~30個描けてこそ仕事だ」と。  
次の世代につなぐためには  
若い人たちに技を教えるべく、今では、商品が売れなければなりません。需要がなければ、次の商品は作れませんから。あとは、こうしているところに取り上げてもらう、皆さんに仕事を知ってもらえることが、次の世代に技を広め、職人を増やすことにつながるのではないかな、と思います。



佐々木さん(左)と、絵付けを見習い中の若原さん(右)。若原さんのほかに、たくさんの若手職人が修行をし、会社を支えている。

## まつばらマルシェで 伝統工芸品を見て、 素晴らしい技を体験してみよう!!

第5回まつばらマルシェにて、大阪伝統工芸品の展示と、伝統工芸士による直接体験指導を行います。皆さん、ぜひこの機会に伝統工芸の世界に触れてみませんか。  
とき 11月8日(土) ところ 市民体育館内  
問合せ 産業振興課 (☎337-3112)



### 地場の工芸品がもたらす 「本当の豊かさ」

古くからの日本の産業は、今どんどん弱体化しています。その一方、海外から日本の和食や観光は脚光を浴びています。  
豊かさは、突然やってこないし、お金を持つことだけではない。地場を愛し、身近なものに愛情を注ぎ、発掘することも豊かさではないでしょうか。  
今こそ「本当の豊かさ」を皆さん、見直してみませんか。  
大阪工芸協会前会長  
平金有一さん(松原市在住)